

## 卓越大学院プログラム現地視察報告書(令和4年度)

卓越大学院プログラム委員会

機 関 名	名古屋大学	整 理 番 号	1809
プログラム名称	トランスフォーマティブ化学生命融合研究大学院プログラム		
プログラム責任者	藤巻 朗	プログラムコーディネーター	山口 茂弘
<p>1. 進捗状況概要</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 学生への全学的支援に関しては、博士前期課程における卓越大学院履修生全員への授業料免除、博士後期課程における大学財源も含めた多様な経済的支援が実施されている。キャリア支援については、博士後期課程中のキャリア教育強化によるポジション獲得支援が実施されており、若手教員採用を促進するための Young Leaders Cultivation プログラムの新卒枠の設置も検討されている。</li> <li>・ 学生の募集に関しては、R3 年度はやや入学申請数が減っているものの、選抜倍率は R2 年度 1.45 倍、 R3 年度 1.24 倍、R4 年度(春)1.22 倍と、プログラム開始時から改善されている。国内外・学内からの優秀な学生の応募者を増やすための説明会・PR 等も、講義・成果報告会・リトリートの学部生への開放も含め、拡充されている。</li> <li>・ 入学審査の不合格者に対するフォローについては、再チャレンジのための仕組みが作られ、R3 年度に 1 名の学生が合格している。また、QE1 の審査方法や合否基準をより明確にし、ガイダンス等で事前に学生に説明・周知するように取り組んでいる。</li> <li>・ カリキュラムに関しては、e ポートフォリオの活用、学生の自主企画への参加の促進や工夫に注力されている。また、学生の要望に応えた取組として、学生アンケートに沿った企業研究者による講演の実施等のカリキュラムの拡充や各種の定期的な交流会の実施に加え、シラバス・ガイダンス等での講義の狙いの共有の徹底、GTR シリーズ講義の単位取得を目的としない聴講の許可、社会力シリーズ講義の拡充などが進められている。</li> <li>・ 国際性の向上については、国際アドバイザリーボードへの著名な研究者の追加、日本人学生のための英語ディベート力養成講座、各研究室でのセミナーの英語化、留学生への院生企画への積極参加による日本人学生と留学生との交流の促進等が図られている。</li> <li>・ 研究総合力養成コースの拡充、取組のグッドプラクティスのアピール (GTR で活躍する学生のインタビューの HP 掲載や「博士人材の企業の交流会」での GTR の取組のアピール)、女子学生を対象としたメンター制度づくり等も進められている。</li> <li>・ 企業など学外者からの指導の機会の拡充については、52%の学生(M2-D3)が学外での融合研究に取り組んでおり、修了審査におけるダブルメンター審査員の 60%が学外者となっており取組が進捗している。また、QE2 審査も学内審査員だけではなく、学生の要望により学外の審査員を許可するなどの拡充も行なっている。</li> <li>・ 他大学の学生との交流、インターンシップ、留学、共同研究の機会については、融合フロンティア研究の機会の積極的な活用を促す一方で、「学際統合物質科学研究機構」(名大・北大・京大・九大による連携組織)、若手共創ワークショップ、独ミューンスター大との IRTG プログラム等を活用し、拡充に努めている。</li> <li>・ 留学生の企業人や日本人学生との交流については、英語によるセミナーの拡充、SDGs セミナーやシリーズ講義の英語字幕化・オンデマンド配信、留学生と日本人学生の協働による院生企画の推進、月例の学生交流会の実施などを通じて促進されている。</li> <li>・ QE2 への準備支援については、QE2 ガイダンスの実施による QE2 の重要性の共有や先</li> </ul>			

輩学生の経験の共有、GTR 学生支援室からの申請案内、QE2 提案書の提出期間の設定などにより改善が進められている。

- ・評価結果に付した留意事項に対して、着実に対応策を講じている。

#### 【大学院教育全体の改革への取組状況】

- ・博士課程教育推進機構により卓越大学院プログラムとリーディングプログラムの運営統合化、グッドプラクティスや知見の共有が図られており、定期的な意見交換や卓越大学院プログラム同士の共同研究も進められるなど、順調に推移している。

#### 2. 意見（改善を要する点、実施した助言等）

- ・ミックスラボとダブルメンターは、本プログラムにおける特徴的な取組であるが、ダブルメンターとミックスラボがやや同義化していることが懸念される。ミックスラボ自体には、様々な物理的な制約などからプログラム生全員が関われないことは理解できるが、一方でダブルメンターを付けただけでミックスラボ的な役割が果たせる訳ではない。可能であれば、例えばダブルメンターの先生の研究室の学生たちとの交流は図られているのか、ダブルメンターが学内／学外研究者／学外企業人であることによる指導の密度や成果の違い等も含め、実質的な効果検証をアンケート、インタビューなどでモニタリングしていただきたい。
- ・融合研究については、D1・D2 学生のうち 15%が「実施できていない」というアンケートの結果が出ているが、これらの学生には個別に丁寧な指導を行なっているということなので、より自由度をもった融合研究促進のための工夫と併せてより一層のフォローアップと成果に期待したい。
- ・R3 年度修了生の 63%が企業へ就職しており、そのうち 3 割程度の学生が、主事業が自身の専門と異なる企業へ就職しており、本プログラムの効果が出始めていることが窺える。今後さらに、修了生を対象とした調査等で、本プログラムが具体的にどのような進路の多様化に貢献したのか明らかにできれば望ましい。
- ・入学審査の不合格者をフォローする仕組みが整えられ始めているので、今後一人でも多くの学生の再チャレンジを促進していただきたい。
- ・ビデオメッセージの配信や学生間・学生-教員間の交流会の定期的な実施を通じて、「融合マインドの共有」の促進が図られており、融合研究の文化が浸透・醸成されつつあることは、学生へのインタビューでも確認された。融合研究が目的ではなく、それを通じて、個々の学生の博士研究をより面白く豊かなものにすることを学生は理解しプログラムに参加しているので、引き続きプログラムとして融合マインドの拡充が期待される。
- ・本プログラムにおける「ミックス」の考え方は異分野に渡る融合研究だけでなく、若手研究者（助教・ポスドク）との交流・共同研究や留学生と日本人学生間の交流という形でも促進されることが大事だと思われるので、今後さらに仕組みづくり・工夫などに努めていただきたい。
- ・コロナ禍で制約を受けていた、海外の研究室でのインターンや、対面による学生間の交流機会（留学生と日本人の交流を含む）の拡充について、進展を期待する。